

院生・若手学際ワークショップ

美術史にとっての史料・ 歴史学にとっての美術



画像: Simone Martini, Public domain, via Wikimedia Commons

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Simone_Martini_-_Maest%C3%A0_-_Google_Art_Project.jpg

日時: 3月28日(土) 10時~12時

場所: 京都大学吉田南キャンパス 吉田南1号館1共26 演習室

§

美術史研究者と歴史学研究者は、同じ種類の史資料を扱いつつ、異なる目的と方法論で対象にアプローチします。何を共有し、何をともに作ることができるのでしょうか？本ワークショップでは、両分野の院生・若手研究者たちが方法論の共通性と相違を学び、課題や関心をシェアし、将来の学際研究推進力をともに育てることを目指します。今回は美術史の院生の研究報告と、歴史学の院生のコメントを受けて、多様な世代・分野の参加者とともに円卓型で自由に議論し発展させます。若手を囲みつつ全キャリアステージの方々のご参加を歓迎します。

§

報告者：鳥山倫史(京都大学人間・環境学研究科修士課程)

「画家の歴史から画派の歴史へ——ルイジ・ランツィ『イタリア 絵画史』(1809年)における画家の体系化をめぐる一考察」

コメンテーター：番井大斗(京都大学人間・環境学研究科修士課程)

報告概要：「フィレンツェ大公の下、絵画館の保存管理の役職に就いていた L. ランツィ(1732-1810)の『イタリア絵画史』(1809年)は、古代から18世紀にいたる数多のイタリア人画家を、14の「画派」に分類・体系化したものであり、従来の画家の列伝形式とは異なる、イタリア美術史において画期的な著作であった。今日も用いられる「ヴェネツィア派」「シエナ派」「ナポリ派」等の分類も、この著作に負っている。ランツィはなぜ「画派の歴史」を編纂しようとしたのか、そしていかなる基準で「画派」に分類しようとしたのか。彼のテキストや作例、同時代の学問的、政治的、思想的な動向を踏まえつつ検討を試みたい。

企画・運営：佐藤公美(京都大学人間・環境学研究科教授)

仲間絢(京都大学白眉センター／文学研究科特定准教授)

お問い合わせ先：sato.hitomi.5k@kyoto-u.ac.jp (佐藤公美)